# クリちゃんの動物園散歩（五）

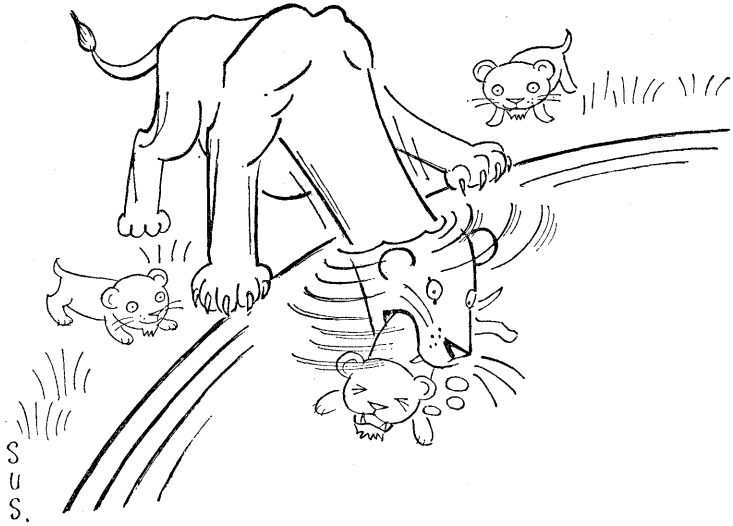
根本　進

ドイツには、動物の数や設備の充実しているので有名な動物園がいくつかありますが、ケルンの動物園もその一つです。

もう七、八年前になりますが、そのころ南米や東南アジア、そしてマダガスカル島などの珍らしい猿たちが沢山揃っているのにすっかり感心して、ここへ三日間通いました。そのおかげでめったにない場面にも出会う事が出来ました。

ライオンが赤ちゃんを産んで一ヵ月だったか、四十日だったか忘れましたが、その母親を子連れで今日はじめて父親といっしょの檻に入れてみるという事でした。先に広い放飼場に入っていた父親は、しばらく振りに戸口に奥さんの姿をみてさぞ嬉しかったのでしょう。先方の御機嫌もかまわず、さっと一気に近づいて行きましたが、一メートルぐらいそばまで行った所で突如一喝、猛烈な攻撃を受けました。その時の一声の大きかったこと、爪をむき出しにした前肢の電撃的パンチの物凄かったことといったらありません。私の心臓が一瞬ドキンとして止った気がした程でした。

立派なタテガミの雄ライオンでしたが、くるりと後を向き尻尾を巻いて逃げて行きました。その一目散振りが面白かったこと、母親とは本当に強いものなんだなあという感銘は忘




れられません。

それからすぐ後に続いて起きたアクシデントも興味深いものでした。怒った母親の足もとには何もわからぬ三匹の赤ん坊がキョトンとした顔であたりをみていましたが、その中の一匹はヨチヨチと池のふちへ歩いて行き、足を踏みはずして水中に落ちてしまいました。静かだった水面から波紋がみるみる広がって、それから母親の眼に映ったのでしょう。母親はびっくりして水辺に駆け寄りました。

池は急に深くなっているらしく、浮きつ沈みつアップアップやっています。母親はいままでとは打って変って、オロオロオドオド。父親をたたいたばかりの前肢を今度はなるべく柔かに使って、赤ん坊を抱きかかえようと水の中へさし出しますが、生憎体にさわると赤ん坊は水中に沈みます。

二、三度こんな事を繰り返して無駄とわかると、今度は両前肢を池の端にふんばって顔を水中に入れました。深く、しまいに首までつっこんで、やっと赤ん坊の胴体を噛んで引き上げました。

池からすこし離れた草の上で、赤ん坊を口から放すと、赤ん坊の体中を何度も何度もたんねんに舐めまわしていました。これがもしアフリカの野生生活だったら、あたりには敵

だらけ、例えばワニが音もなくスーッときてパクリ……。などと起りそうな場面を想像しながら、それにしても数分の中に怒り、慌て、そしていまは全くホッとした様子が、すっかり人間の母親と変らぬ感じでした。

同じ日の午後、別の母親ライオンから大きくなった子どもを引き離す作業がまた大変でした。

ライオンは何処の動物園でもよく生れて元気に育つので、増え過ぎても処方に困るようです。いまここでは去年生れたオスの仔をサーカスが引き取りにきていましたが、まず運搬用の檻に母親といっしょに移して、この檻の中でタイミングよく仕切って別々に分けようとしているのでした。ところが動物のカンはその危険を察していると見えてこの母子は片時も離れようとしないのです。そこでこの母親が以前に産んだ二歳のメスを別の檻に入れて近づけ、これを木の棒でつついてそっちへ母親の気をひこうと試みました。

棒でつつかれた若メスが悲鳴をあげると、これを見ている母親は本当に怒り狂ったように吠えたてます。なんとムゴイことを……と思いながらもここは我慢、コンクリートの地下室にこだまするその咆哮の物凄さといったらありません。でも離れまいとする仔は、もう可成り大きいのに母親の腹の下にもぐり込んで動きません。

「全くこれではツンボになってしまう」気まぎらわしに私はそんな独り言をいってみましたが、実は怒り声が心に痛く響いて、とうとうこらえきれず途中で帰ることにしました。廊下の続きには、虎、豹、山猫……と寝部屋が続いていましたが、同族の怒り声に聞き耳をたてている他の猛獣たちは無気味にシーンとしていたのも印象的でした。

ここの動物園では飼育係員に変り種の人がいました。

彼に出会ったのはサル山(カニクイザルだったと思います)で、数人の飼育係員が何かを調べるためか予防注射のためかでサルを捕獲していました。大きな網を持ってサルを追いかけるのですが、相手ははしっこくてなかなか捕りません。それに人間が急傾斜の擬岩の山に登るのも大変です。ただ一人実に素早くサルを捕えている若い係員がいました。

作業が終ってみんなが一息入れた時に、「あいつは全く猿を捕えるのがうまい」とみんなが賞めていましたが、当人は疲れた様子も見せず私に向って「あなたは日本人か？　日本のサルについてききたい……」と話しかけてきました。どんな事をきかれて、私がどんな事を答えたかも忘れましたが、少し話す中に彼はオーストラリア人で、鳥の研究者、――特

にアフリカのオウムについて勉強したくて、現地へたどりつくまで方々の動物園でアルバイトをしながら旅をつづけているのだと言うことで、「どこのＺＯＯでもボクの本業そっちのけにしてサルを捕えさせられる」と笑っていました。目的地に着くまで何年かかると思っているかときいたら「さあ、あと四、五年はかかっても仕方がないね」と、全く覚悟がいいのです。

それはそうかも知れません。どこの動物園でも飼育係がその仕事に馴れるまでにはすぐ半年や一年たってしまうでしょうから。それはともかく動物園の飼育係には面白い人がいます。

動物園が好きになったお客は大抵親切な飼育係員に出会いいろいろ教えられたのがきっかけで……という人が多いでしょう。

私が上野動物園によく行く様になったのも、いまは東武動物園の園長の西山登志雄さんが話しかけてくれたおかげだと思っています。

当時古賀忠道さんが上野の園長で、戦後の園内は紙クズがいっぱい散らかっていて、いくら屑籠を用意しても、なかなかこの中に入れてくれる人がいない、何とかしてみんなが紙くずを屑籠の中に入れてくれるようい知恵はないかと私に相談がありました。結局私はクリちゃんがタコといっしょに紙クズを拾って籠の中に入れている絵をかいて、それをホウロウ板を印刷した屑籠につけてもらいました。そんな事をした前後に、動物園の様子を知ろうとして園内をぶらつていると、西山さんが声をかけてくれて、動物舎の裏側へ案内してもらいました。

動物園の楽屋裏には、予備軍というか控えの動物というか、公開していない動物もいろいろいてあれこれ興味深く見せてもらっていると、突然ライオンがウォーッと檻の中から近くに飛びかかってきたのにはキモをつぶしました。後で解ったのは、西山さんはそのころ河馬の飼育係員でしたが、仕事の合間のいたずらにライオンも手なづけていて、彼が行くとこんな風にとびかかる習慣をつけて人を驚かすことにしていたのでした。

（漫画家）

*